

祭りがつなぐ、人・まち・歴史

神農さんと生國魂さんのお祭り と 伝承

古くからのものと新しいもの、働く場と暮らしの場が入り交じる中央区。区内には地域に根づいたお祭りや伝えていきたい伝承が数多くあります。働く人に馴染みの深い「神農さん」と広く区民に馴染みの深い「生國魂さん」は見どころたくさん。

しんのう

神農さん

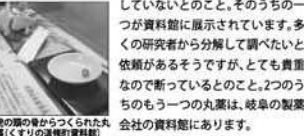
ビジネス街の一角、道修町にある少彦神社。11月22、23日の2日間は、くすりの効果や病気の回復を祈る神農祭と、瀧りのあちこちらに張子の虎が出現！

くすりのお祭り「神農祭」

御笠節のイチウの葉が見事に色づく秋、道修町は「神農祭」で賑わいます。神農祭とは薬の神や交易の神をまつている少彦神社の例祭で、毎年11月22、23日に健康増進、病完癒を願って行われます。昔から大阪の1年の祭りは正月のあびす祭で始まり、神農祭で終わるため、「とめの祭り」と言われてきました。毎年2日間で全国各地から5万人程度が訪れます。当日は明筋から大筋まで張子の虎の物つたのぼりや露店が並び、参拝者を迎えます。「神農祭」より、親しみ深く「神農さん」と呼ばれることを耳にします。このお祭りを変えるのは、「薬祖訓(やくそこ)」、頭家(とうけ)制度があって、議の中から委員が選ばれ、祭りが運営されています。大阪のような大都市では非常に珍しいといふことで、「薬祖訓行事」は大阪市の無形文化財に指定されています。

神農祭の張子の虎

この神農祭、なぜ「張子の虎」が飾られるのでしょうか？昔、コレラが流行した際、虎の頭の骨を使った丸薬がつけられました。その丸薬は神前祈禱され、同時に張子の虎をつくる一環に配られたのです。コレラの流行はおさまり、張子の虎がお守りとして扱われるようになりました。



虎の頭の骨がつけられた丸薬(くすりの道修町資料館)

道修町 昔のまちなみ写真



(左)かつての道修町から大坂城を望む様子、手前の橋脚は「瀧」の文字の看板が見えます



町屋が軒を連ねるかつての道修町と三休橋とこの立の標

神農さんにまつられる2人の神様

少彦名神社では、神農氏と少彦名命がまつられています。当初は唐薬を扱っていたので、神農氏(右図)をまつていたが、次第に和薬を扱うようになった関係で、1870年(安永9年)に少彦名命をまつようになったのが神社の起源とのこと。神社のある場所は元は薬種中買仲間の会所でした。(江戸時代の家並み地図に場所を示しています)



神農氏:古代中国最初の薬師、時に薬を扱った



少彦名命:日本の薬草師

(くすりの道修町資料館ホームページより)

献湯祭で湯の花を頂く

毎月23日に行われる献湯祭(けんとうさい)の満願成就祭が年末の12月23日に行われます。少彦名神社では、神農祭と並んでホームページで紹介されている祭事で、巫女さんがお釜の湯を清めて周囲にまき、その後、小さな小瓶に湯(湯の花)を入れて、参拝者に振る舞います。1月から12回、献湯祭に参った方は、満願成就のご祈禱を受けることができます。



12月23日の参拝者は大勢です。近所の方や企業の方が中心。巫女さんの清めたいは資料館に展示されています。

少彦名神社と道修町のあゆみ

江戸時代 船場界隈は各藩の蔵敷地があり、全国の物資を集め、米などは各地に輸送していた。町人を中心とし大業にぞつていた。幕府は薬種中買仲間12人を公認し、和薬改改を所置する。薬の安全と販売業を祈願するたため、薬種中買仲間に組織する伊勢屋が、少彦名を以前よりまつていた神農氏とともに合わせてまつ、少彦名神社が創設された

天明(1837年) 大坂八部の乱で、少彦名が失脚。3年後、小町を建て、神農氏と改称

明治17(1864年) 神社の宗親団体薬祖訓が設立

明治43(1910年) 社務所を新築(今の社務所はこの当時のもの。現在、国の登録文化財)

平成19(2007年) 薬祖訓が大阪市無形文化財(政府行事)に指定される(少彦名神社資料より)

知って得する！地域情報

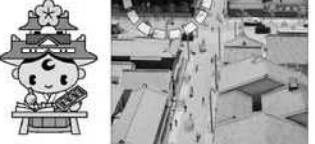
- くすりの道修町資料館
中央区道修町2-1-8 電話06-6231-6958 開館/月～土 午前10時～午後4時まで、入館無料。日・祝祭日、8/13～16、12/28～1/4は休館。3千点もの文書類は文化財になっています。
- くすりの道修町資料館ホームページ
<http://www.kusuri-doshomachi.org.jp/index1.html>
資料館情報ほか、少彦名神社や祭事のお知らせ、道修町の概要、まちまじりと歴史、薬草の紹介など、大変充実した内容です。全館の壁紙の1日かかるといふくらい、興味深いページです。
- 少彦名神社・お祭り(主なもの)
 - ・1月1日 歳旦祭
 - ・1月4～7日 新年祈願祭(日曜は年によって日程が多少変更あり)
 - ・11月22、23日 神農祭
 - ・12月冬至 冬至祭
 - ・毎月1、15、23日 月例祭
 - ・毎月23日 献湯祭奉茶奉養(湯神楽奉養) 8時30分～、12時30分～
 - ・12月23日 満願成就祭

124の中買仲間から始まった道修町の成り立ち

江戸時代、薬の売買を行うには株仲間に入る必要がありました。大坂の場合、その株仲間は、道修町1～3丁目、124軒で、密によう通達され、すべてがその地域で営業していましたが、これは、集約されていると幕府からの通達が行いやすかったという理由です。新しく株仲間に入るには30両程度(現在の価値では約300～400円)を払って権利を得る必要があり、他に年間通費なども必要であったそうです。

道修町で行われていたことは、薬種の売買であり、製造ではありません。当時、薬の原料は長崎を経由して大坂に入ってきました。唐薬、和薬とあって、和薬改改所で本物かどうかを検品し、偽度がつけられました。薬を検品し全国に送ることで薬種の流通拠点として発達した道修町を支えたのは、その技術の高さから広まった「道修町の薬ならば安心」というブランドイメージだったのです。

しかし、薬の業務は経験型で行われ、非常に難しいものでした。そのため、神頼みで間違いのない仕事をしようと、薬業関係者は、神社をまつり、参拝してました。



江戸時代の道修町の様子
上左の角は小西家住宅(大阪市立西成区)のユウナマ

氏名	住所	職名	備考
伊勢屋	道修町	中買	
...

大切な資料が引き継がれてきた防災の知恵

天保8年(1837年)に大坂八部の乱で神社は焼け、11年に再びまつられました。大坂の乱でこの辺りも焼けたにも関わらず、多くの資料が残っているのは、「屋付人足(かけつけんそく)」に書類を持ち出されたからではないか、といわれています。江戸時代は前例や経験が大切だったので、書類が大変重要なものでした。

耳寄りばなし～ 実物あり、映像あり。貴重資料がいっぱい

少彦名神社で宮司をされている別所さんにお話を伺いました。資料館には、薬種中買仲間が大切に保管してきた資料が展示されています。約3千点もの文書類は文化財に指定されています。「白粉(おしろい)は本来、顔につけますが、それを飲むと梅毒に効く」との風習がある時広まりました。でも、それには水銀などが含まれているので実はよくない、ということを知り、に伝えた書物もあります」と資料1点1点を詳しく説明して頂きました。特に映像コーナーは来館者に人気とのこと。

いくたま

生國魂さん

なぜ、天王寺区にある神社を取り上げるの？「生國魂」という難しい表記の一方で「いくたまさん」と親しまれてきた生國魂神社は、昔も今も中央区に暮らしの拠り所なんです。



親しみやすい呼び名の「いくたまさん」

生國魂神社のはじまりは、2700年前、歴史と神話の間です。神武天皇が九州から東征を行って統一国家をつくるため、大坂に上陸しました。生國魂神社にまつられているのは生島大神、足島大神で、生島大神は「生(なま)る」、足島大神は「成長する」を意味し、日本列島そのものの神格であり、当時日本の中心と考えられていた大坂(今の大阪城の辺り)にまつられたのです。そのため、生國魂神社にはきわめて分社が少ないです。

大坂城の地は、海陸から敵が攻めてきても対応できる要害でした。武士が権力を持ち出した戦国時代、太閤さんは大坂城を築城し、当時、大坂城の次の高台だった現在地に神社を移したのです。

「生國魂神社」＝「いくたまさん」

「生國魂」は、正式には「イクタマ」と読みます。昔は神様の名前を直接言うのははばかれるので、庶民の間では「いくたまさん」と呼ばれるようになりました。省略して呼んだら、さん付けで呼ぶのは、大人の気遣い、上方の文化でもあるので、それでこの呼び名になったのでしょう。

お城のような屋根を持つ本殿

大社といふと、出雲大社が思い浮かぶ人が多いでしょう。出雲大社の本殿の高さは24mあり、日本ではそれ以上の高さの社は建てないことになっていますが、生國魂神社の本殿も20mを超える大きな社です。太閤さんが守城のイメージに近い大きな社を建てたいということで寄進しました。全国で唯一の生國魂道で建てられています。江戸時代、旅行する船は、この社殿や天王寺さん(四天王寺)の塔をめざして運航していました。

生國魂神社のあゆみ

- 神武天皇が上町台地の最盛期(紀元前6世紀/今の大阪城)に、生島・足島大神をまつった
- 浄土真宗の源朝臣(上人)が山科の生國魂神社に、石山院を建設。のちに山科の本願寺の境内に、石山が本山となる
- 浄土真宗と織田家の対立が深まり、石山合戦の末、神社も焼失
- 豊臣秀吉の大坂城築城の際、現在の地に移築
- 大坂夏の陣で焼失した社殿を徳川秀忠が再建
- 天保8年(1837年) 大坂八部の乱で焼失
- 明治45(1912年) 国の史跡に指定
- 戦後の火災で焼失
- 戦後1945年 復興のため再建
- 昭和31(1956年) 創設当時の生國魂神社(現在大坂城の場所)の遺構は海没した

いくたま夏祭り

「陸の生國魂」と「川の天神」 生國魂神社では年間100以上の大神宮祭りを行っています。中でも最大の神事は夏祭りで大坂三祭りの一つに「生國魂」という難しい表記の一方で「いくたまさん」と親しまれてきた生國魂神社は、昔も今も中央区に暮らしの拠り所なんです。

戦前までは、もっと盛大で300万人の人を集めていました。陸の生國魂、川の天神と言われ、天神祭と対になるお祭りだったので。戦前のお祭りは行列の本体だけで2千人ほど。先頭が大坂城に着く頃、最後尾がまだ本宮に残っているほどの大行列だったこと。また、戦前までは、天満橋の橋の手前で生國魂さん天神さん両神主による御礼が行われていました。

現在の生國魂神社のお祭りは、本宮を出発し、昔の社殿があった大阪城の元宮まで行きます。それから中央区の本町橋のこの行宮に行き、生國魂神社本宮にいくというルートです。(左図参照)



昔(右)当時の社太鼓は今より数倍大きく、持ち上げ力がありました。その子太鼓は、運送や修理に大変な作業が多かったといわれています(昭和11年)

5万個のスイカが集まる

夏祭りの生國魂神社に全国から5万個のスイカが集まるという行事が、戦前の新聞が見つかりました。スイカは祭りに奉仕する子ども水分補給のために送られてきました。

それだけ奉仕している子ども数も多かったということがわかるし、それ以上に大人もたくさん奉仕していたらと思うられます。当時の民衆の祭りへの思いが伝わるお話です。

いくたま夏祭りの ちょっぴり話

いくたま夏祭りを支援するメンバーの一人、各町四丁目振興司会員の窪田会長に夏祭りのエピソードを伺いました。平成18年に大阪医療センター事務局より入院中の患者さんのために、「ぜひ病院にも奇くもつらつ(患者さん元気を元気づけてください)と言われました。お祭りの際、手前の不安な気持ちが吹っ飛びました！」とあるお母さんはとても喜んでそうです。

窪田さんの地域ではマンションが増え、子どもも多くなり、小学校経由で情報が伝わり、祭りの太鼓に参加する子どもが年々増えていくとのこと。「好きな祭りに通じて奉仕の心や集団のルールを学んでいるようです。太鼓を教えるのは若年部のメンバー、大人も元気が出るように、地域の雰囲気も明るくなりました」と話していました。

知って得する！地域情報

- 「生國魂神社」概要(大阪市天王寺区ホームページ)
http://www.city.osaka.jp/tennoji/spt/natsuru/19_hukunin/taisa.html
天王寺区生玉町13-9 電話06-6771-0002
- 生國魂神社・お祭り(主なもの)
 - ・7月11、12日 いくたま夏祭り
 - ・8月11、12日 新築(たぎのう)
 - ・9月第1土、日曜日 彦八まつり



▲(上)いくたま夏祭りの衣装は今も昔も変わらず、シンプルで斬新なデザイン(昭和3年) (下)京都市の時代館のように、築業も建て行列(昭和7年)



昭和35年頃の祭りの風景。懐かしい風景が背後に残っています(提供:生國魂神社ほか)



現在のお祭りはトラックで

昭和35年頃の祭りの風景。懐かしい風景が背後に残っています(提供:生國魂神社ほか)

耳寄りばなし～ 「氏子」って、ナンダロウ？ 「祭り」って、なぜ必要？

「実は氏子の大半が中央区なんです」と生國魂神社の権禰宜(ごんねぎ)の中村さんは話されました。推進委員会メンバーが「祭りへの参加を呼びかける」といふ話。氏子じゃないからと断られる。氏子っていつたか？「氏子って何？」という質問を投げかけました。中村さんは「簡単に言うと地縁です。同じ神宮をまつく仲間、お祭りを交える仲間です」と答えていました。「今の時代、地域には様々な団体があり、それぞれがそれぞれの目的に向かって活動していますが、それら団体を統合しようか？」という質問を投げかけました。中村さんは「それら団体を統合しようか？」といふ話。氏子っていつたか？「氏子って何？」という質問を投げかけました。中村さんは「簡単に言うと地縁です。同じ神宮をまつく仲間、お祭りを交える仲間です」と答えていました。「今の時代、地域には様々な団体があり、それぞれがそれぞれの目的に向かって活動していますが、それら団体を統合しようか？」という質問を投げかけました。

お祭りは子どもが社会と関われる場

「それのお祭りに参加は目的があります。それを通じてできることは、住民同士のコミュニティが結びつくということ。社長も従業員も大人も子どもも皆で力を合わせてお祭りになります。それが一番大事なこと。残念ながらお祭りに通じて一緒に汗をかいて自分の力を出す場が今は少なくなっています。子どもが地域社会に参加する場を提供するのは大人の役目。お祭りはそういう場になるし、大人がお祭りに参加する場を子どもたちに見せることも、非常によい勉強になると思います。いくたま夏祭りへの参加は町会を通じて行われます。夏頃になると地域の掲示板に祭りのポスターが張り出されます。関心のある方は、町会の方にご相談ください。